

戦場の小児科医

熊谷 博子

東京新聞 夕刊コラム『放射線』（現・『紙つぶて』） 2007年6月4日

「一緒に組むはずだったアフガン人の医者が、昨年殺されました」

今から20年前、パキスタンの国境の町・ペシャワルで、ユニセフの責任者として働いていた喜多悦子さんは、私のカメラにそう言った。

彼女は、日本人として初めて紛争地へ派遣された医者である。もともとは小児科医で血液の専門家だったが、その後カンボジア、ルワンダ、コンゴなど70ヶ国以上の紛争地を訪ねた“戦場の小児科医”だ。

現在は、日本赤十字九州国際看護大学の学長をしている。先日このドキュメンタリーを、ここの特別授業で、学生たちと一緒に久しぶりに観た。脱水症状で、あと数時間の命だという子ども。喜多さんはただ無念の思いで、かたわらに付き添う母親の肩にじっと手を置き、励ますしかできない。「生きながら、まるで老衰と同じように死んでいく子どもたちをたくさんみました。治療のしようがない」という。

遠い難民キャンプから何時間もかけ、膨れたおなかにしわしわの尻と足の赤ん坊を抱き、病院まで歩いてくる女たち。医者はこれがいけないと、哺乳瓶をさす。彼女たちは粉ミルクがいいと思ひ込み、しかし十分買える金はない。不衛生な水で溶いた薄い薄いミルクを飲ませている。

多くは字が読めず、正しい知識を得る方法がない。喜多さんたちが“母親学級”を計画したら、女を教育するなら殺す、と何度も脅し電話がはいる、断念をした。しかも輸出していたのは日本の粉ミルク会社だ。

やりきれない。もっとやりきれないのは、この20年間、状況がよくなっていないことだ。改めてまだやるべきことがたくさんあると感じた、自分への授業であった。